

一月作品

月集スバル

☆一月特別作品☆

泉湧くやうに

水島晴子 兵庫

泉湧くやうに若きらうたひけり「戦争を知らない子供たち」夏
濡れ髪をかわかしくれるこのひとのみづからはつねにペールをかむる
ヘジャブ黒きかげの視線のややゆれて「インドネシア」と母国を告げつ
夕靄は広野をこめて高層のうるむあかりよ遠き愛とも
この朝の風と陽を享けいづぼんの溝萩に穂のむらさき細し

祖国

桑原正紀 東京

秋空のあをの濼^{ふか}さやアウンサンスーチーさんのその後を知らず
殺さねど生かもしもない禁錮刑に処されて今年七十八歳
ロンジーの似合ふ細身にて頑なに阿らざりき軍事故権に
安穩な道もありしに振り捨ててその身ささげし(祖国)とは何
祖国といふさびしき響き噛みしめて夜ふけの繁き虫の音を聴く

満月

小島 ゆかり 東京

五十鈴川行き^{しちぢう}の列車で白鳥とすれちがふいまころしらたま
何を待つ人びとならん観月のこよひ集ひて月を待つなる
内宮^{ないくう}の闇に望月のぼりつつ迦陵頻伽の舞衣^{まひぎぬ}あかし

満月のかげゆらゆらにうごかしてゆらゆらに夜の水は生き物
鳥ならばどんな日ならん満月のひと夜ののちの秋の日けふは
実家の秋
大野英子 福岡

実りある稲田の畦を囲みゆく赤まんじゆしやげ白まんじゆしやげ
部屋なかでアオマツムシが鳴いてあると思ふまで近し実家の秋は
朝の海に入りゆくはずの名月が海ざりざりの雲に紛れる
まんげつを見送るのちに昇りくるたいやうはいつもいつもまんまる
枯葉散る乾いた土がむつくりと起き上がる、ああスズメが一羽

☆

☆

武田 弘之 神奈川

保育園なかりし戦時寺庭に遊戯習ひてたのしかりけり
海苔巻かぬお握り三つ提げ持ちて寺に通ひき幼きわれは
本堂に経文を読む和尚さんのリズムよかりき意味わからねど
いつ逝くもよろしかるべきわれがまだ生きゐて九十一の歌詠む
北狐集ふ竹田津山荘に詠み置きし歌今いかにある

高野 公彦 千葉

乳児のこゑひびくことなきマンションに住みて夕空に孤星見ゆ
あかときを二、三十羽の鴉来て飛び交ひ鳴くは電線の愉楽
元日と元旦の違い思ふとき「旦」は茜のひかり放てり
無為といふ贅沢の日々過ごしゐてふと浮かぶ問へお前は誰？
夕雲よ少年老い易くこの星はしんしんと戦止み難くあり

奥村 晃 作* 東京

杖持たず一人で教室に見えてます九十四の田辺百合絵さん
八十代前半と思ひいたりしが九十四と知りて驚く
そう言えば市川教室の松田さん九五にして良き歌作る
馬場あき子の高峰は置いて市井にも高齢歌人ポツリポツリ居ます
生徒さん九十六、九十四、九十二みな女性、男性で九十代の知り合ひは稀
泥見えぬまでびつしりと生ひし草小口より順に抜きゆくたのし
木の葉散るやうに地上に降りてこし黄蝶ひとひら深みゆく秋
ゴミ捨てに行かなと出でし勝手口不意に浴びたり秋の日差しを
一本のみ庭に灯りし彼岸花見切りをつけしごとく萌え来ず
正座して洗濯物をたたみをつつましくして泪ぐましも

森重 香代子 山口

日影 康子 富山

早朝の寺庭の草引き一時間終へきて仏間に正信偈あぐ
静もれる寺の奥処の部屋の前ミズキの若木に紅葉始まる
一人歩きするなど言はるる生活にて夕べに門を閉めに出るのみ
史上初の八冠の快拳を成就せし金字塔を秋夜のテレビに見たり
最善手を読む力ありて緊迫の最終盤にて藤井聡太逆転す

影山 一男 千葉

ジェンダーレスそれはわかるが女優こそ呼び名ふさはし吉永小百合
女流歌人特集ありしふた昔み昔まへはあけがたの夢
差別する心たしかに裡にあり格好つけて論挑みしが
面倒を避けて無言のままにゐる性なくつねに疎まれてきつ
街川にあしたの波のきらめくを眩しみにつつ鷗をさがす

狩野 一男 東京

錦秋や東北自動車道を来るデコトラ十台 文太の文化
戦争を知らない子供たちも古いひとり、ひとりとまた脱けてゆく
プロフェッサー目指しつつ逝つたプロレスラージャンボ鶴田といふ怪物よ
プロレスラー：スポーツ科学研究者鶴田友美は四十九で没
十月の世田谷文学館の池、鯉の色ハラなどあらざらむ

宮里 信輝 神奈川

わが家より一〇〇歩あるけば風景は黄金に熟るる穀倉地帯
みわたせる限り稲穂は黄金に稔れり今年は台風もなく
黄金に熟れたる稲を刈りゐる人はあやつるコンバインなり
稲刈るは人のあやつるコンバイン手で刈る人は見なくなりたり
クルマにて車道をわれは走る人令和五年もあと三ヶ月

木 畑 紀 子 京 都

蝶に成りかへり来たれり三つきまへ行方不明となりし青虫
ひとひらの嫩葉に薄黄の粒ふたつ此はまぎれなき揚羽蝶の卵
卵みつげ十日のちにまだら茶の虫が葉にをり葉は喰はれをり
脱皮してまた脱皮してやうやくに終齢あをむしまた旅に出む
ひとたびも咲かざる利休梅の木は蝶のいのちをやしなひ裸

島 田 暉 神奈川

いとまなき花火の華を見つづけぬ恋することもなくなりし老
秋晴れてあまたの柿の空を撫で讀へよ赤き生命の光り
食べるもの少なくなりし老の唇秋の夜ふけに人恋ふことも
芝の吐く息はかすかに霧となり少女らの声はなやぎ透る
戦後すぐ三食さへもままならず母の晴着を簾に換へたり

大 松 達 知 * 東 京

赤鬼の目玉のような瘰疽なりたのしむ心いくばくかある
勝った側から見て勝った戦争の、へ茂と略される国も戦いき
良いことのようにしやらりと書いてある、この戦争に圧勝しました。
圧勝とあればいくらか高ぶれるころのままに二、三行読む
信じてる、人は言うなりほんとうは迷えるころあるこんなとき

田 宮 朋 子 新 潟

いにしへびと想ひつつ聞くみづうみのほとりの葦の葉擦れの音を
夕映えにつかのま彩ひ金欄の帯地のやうな琵琶湖の水
しろがねの朝の湖面に浮かびある小舟一葉うごくともなし
鳩の湖その光陰の一刹那みぎはの砂を夫と踏みゆく
みづうみのひかり入りくる披露宴姪は近江の人となりたり

津 金 規 雄 神奈川

日和下駄鳴らし富坂くんだりゆく稀代の拗ね者荷風山人
雨に樹に移ろふ四季を見てやまぬ花柳小説「腕くらべ」良し
古き地図ひろげつつ読む「すみだ川」お糸・長吉・墨堤をゆく
残酷なまでの隔たり谷崎と荷風が遺しし戦後の業績
〈偏奇館〉跡地激変 否々々、超高層のビルこそ幻影

小 山 富 紀 子 京 都

切り取りて心のノートに貼りおかむ人無き波止に仰ぐ秋空
ねころべば空はこんなに広がった秋の小きな港のまひる
鳶の輪の下に二時間渡船待つ大きな荷を持つ島の人らと
余所者の我を見張るがにピーヒョロロ島を歩めばとんびが鳴けり
島外の同級生に「また、あした」波止を駆けつつ手を振る島の子

清 水 正 子 神奈川

「ペイルート哀歌」この五首を詠みしひと重信房子は結社賞歌人
獄中の作歌は救ひだつたかも：出所後の歌にけふ出合ひたり
日本赤軍最高幹部なりし日の自負にはとほき嗟嘆は何ぞ
相愛のパレスチナ兵士かも知れずランボー語り見つめ合ひしは
詠つてはならぬ触れてはならぬことあるべし時間の浄化を経て

小 嶋 一 郎 佐 賀

老いの眼は試されてゐる転がりて消えたる硬貨探しあぐねて
欠伸して耳奥に鳴る音のありけふよりわれは八十八歳
草中に育ちて玉なすキャベツあり一途なるもの目閉ちて思ふ
われは菊妻はダリアを育てて干渉をせずこの庭畑に
「バイ」と「タイ」使ひ分けして東京の女孫が十二の誕生日告ぐ

後藤 美子 北海道

秋の陽となりてあかるしすぎもの干し並めゆきぬ竿をぬぐひて
風なくて秋の陽満てるペランダにも干す幸ひアキアカネ来よ
あめつづく地域に注意報のテロップ 光あふれて札幌は晴れ
カロテノイド、アントシアニン、タンニンなどもあれ山の秋色美し
今日一日長月のうち三月のち年あらたまる 思へば疾し

福士りか 青森

この夏の猛暑を耐へてまるまると太りし栗の艶のよろしさ
鬼皮は鎧のごとく渋皮はシールのごとく易くは剥かせず
ひとつひとつ剥く栗の皮二時間を経てやうやつとザルに半分
栗ごはんの栗ほろほると炊きあがる幸福は手間がかかるものだよ
ストーブのまへで居眠る猫の手に栗ひとつ どんな夢を見てゐる

藤野 早苗 福岡

母に会ふただそれだけの行ひがドラマチックなメデイカルホーム
清潔なバリアフリーの空間に蜘蛛の網のごとく老いらの視線
金木犀咲き満ちたれど匂はざる二重サツシのメデイカルホーム
優良児と言はれし卵も叛乱す物価高騰止まらざる秋
さはあれど肉より卵は安きゆゑ一バックごといざ味玉子

風間 博夫 千葉

高圧ガス取り扱ひに必要な資格山張らず試験受けにき
木の芽とは木通の蔓の新芽なり茹でて苦みの春の山菜
筑波山ふもとの宿の女将さん得意は四六のガマの口上
あかねさす君をわすれずわが胸の熾火静かにしづかにもえて
たくひれのしろきうなじのはつはるのすきとほる汗ぬぐひやりにき

田中 愛子 埼玉

炎熱もいつしか去りて細かなるペンギン柄のワンピースしまふ
おほらかでどこか楽しげ大阪の人が使ふ「なんや知らんけど」
錦秋の朝に「昂」ながれきて谷村新司の死が伝へらる
ひつじ雲追へるふたつのひとかげは或る日の父とわれかも知れず
をさならは「あいこおばちゃん」と喜びきいわささちひろの少年の絵を

奥村晃作歌集 令和5年12月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

蜘蛛の歌 コスモス叢書第1232編 六花書林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七-151-16

福士りか歌集 令和5年11月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

大空のコントラバス コスモス叢書第1228編 柀書房

著者住所 〒036-0233 青森県平川市日沼高田二七-四

田中愛子歌集 令和5年11月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋の水深 コスモス叢書第1229編 柀書房

著者住所 〒338-0001 埼玉県さいたま市中央区上落合

五-17-1706 蓮尾方

橘 芳 園 新 潟

生日も命日も冬凜とせる歌を詠みたり安立スハル

保存用中の一冊たまはりぬ『この梅生ずべし』大切に持つ

京生まれ母も安立先生も寺を護れとわれをさとしぬ

京生まれ生なりの品を心髓にたたふる安立スハルの歌は

なんのため歌を詠むかといふ疑問『安立スハル全歌集』読みてまた消す

水 上 比呂美 東京

五ヶ月の赤子は男の子の顔になりブルーの服を着る神無月

福の神、ピリケンさんと呼ばれつつぐいぐい育つ娘の赤子

娘の子は頬が重いよ寝返りを打たうとCの字に反りぬたる

抱き上ぐるとき『それ』と声かけてをり五ヶ月で八キロの小米オソコメ俵

生き物のかたまりである赤んぼに気化熱、地熱、融解熱あり

鈴木 竹 志 愛知

数独の「独」は「孤独」の「独」かもと検索サイトにお尋ねをする

数独の「独」は「独身」の「独」といふお答へのありなるほどなるほど

言の葉は生まれいでたるその日より他者の悪意にさらされるも

けふもまた学生たちに教へらる『特典会』とふイベントあるを

さらにまた「同担拒否」とふ語のありて若者言葉の迷宮に入る

原 賀 璽 子 東京

早朝のポスト帰りの空にあり往きは背なりし九十度の虹

早且にゴルフバッグを持つひとの四足歩行のやうな足どり

ペリカンを胸にかかへて佇つてゐたあなたでしたね森の出口で

大学生と幼稚園児の差のありき夫とわたしの日々をおもへば

歌束をくりつつ思ふもう死んでゐる歌いまも生きてゐる歌

水 上 芙 季 神奈川

即興で姉が作った「ピポバ歌」どんな歌よりよく寝るわが子

保育園見学でつい見てしまふ下駄箱にへはると(そうまへりゆうせい)

雨降つて世界が閉ぢられてゆく心地ハーゲンダッツをゆつくり舐める

襟足がじやくかんをばさんみただと寝返りしさうでしない子見てをり

妻になり母親となりこの秋は電動自転車坂道をゆく

松 尾 祥 子 東京

青空に金木犀のかをる朝四十一度超え孫入院す

上の子に次ぎ0歳も川崎病ババは倒れてる場合でないのに

ふつふつと疲れわき来ぬ泥のやうなからだシートに横たへるとき

高速でまはる独楽ゆつくりまはる独楽どちらが勝ちといふにあらねど

その人の歌は毘陀多の糸となりわれを導く天の高みへ

鈴木 千登世 山口

サイレントニヤールしてくる猫逝きて沓脱ぎ石の広い秋の日

ご近所の茶猫とら猫とら親分毛並みふくふく陽だまりにゐき

職離れ後ふはふはと籠るわれとただ傍に寝そべる猫と

〈親分〉は古き知人のご黙す目を細めつつわけ知りがほに

土掘りて猫たたずみし畝の上に若芽やさしくすずなすずしろ

小 島 な お* 東京

A M H検査終わってカンナ撮る腕にちいさい四角いシール

凍らせて眠らす卵子生涯を歩いて過ごす鳩みただと

融解後生存率の% 芒のなかのすずしさのなか

イラストの卵の表情三本の線であらゆる感情になる

シュミレーションワーク教えてみましょ。数えることはこの世のはじめ

小田部 雅子 静岡

斉藤 梢 宮城

冷房を切りたる窓に来る風のはや刈りどきの稲穂が匂ふ
いちめんの刈田のなかを駆けゆける子を振りむかす母のよぶ声
北風が吹いて無花果たかき枝に実はあるながら時の止まれり
あたたかき靴下履けば恋ほしもよ厚い皮の田舎まんぢゅう
秋日さす床にねころび流れゆく雲を見てをり 時間がふとる

瞬きをわれがするたび表情が変はる満月 月 生きてゐる
文字は黒、空間は白 歌一首書きて言葉を結び終へたり
目玉焼き二つで満ちる大きな鉄のフライパン冷えてゐる秋
きつぱりと「生きさまが歌」と詠みし人 福井緑さん逝きてしまへり
闘ひて苦しみて人は死にゆくか われの未来にその時がある

詩歌句レッスン ●小島ゆかり

春の到来晴れやかに

《新聞転載》

早春です。

想像以上にコロナ禍が長引き、だれにも我慢の日々がつづくなか、それでもまた、春はやって来ました。今回は、近刊歌集のなかから選んだ春の歌を鑑賞して、みなさんが春の歌を詠むヒントになればと思います。
《あなたにはなくてわたしにのみ続く
死後とふ時間に水仙が咲く》

（永田和宏「置行堀」）

言うまでもなく、亡き妻（歌人・河野裕子さん）の死後を生きる作者の一首。「あなたにはなくてわたしにのみ続く」という切実な感慨のほとりに、水仙の花が咲く。早春の清楚な花が、歌に寂しい気品をもたらし

います。人はみな、だれかの死後を生きるのだと気づかされます。
《未来とは死のことなれどなにか嬉し
辛夷咲く日が桜咲く日》

（川野里子「天窓紀行」短歌日記2020）

一年間の日々を、短歌と短文でつづる短歌日記シリーズの一冊です。

だれかの死後を生きる人々もまた、死へ向かって生きる。「未来とは死のこと」という真実を胸に持ちながら、春の到来を晴れやかに詠んでいます。

そして生者のなかでも死に親しい僧侶には、こんな歌。

《墓原に春の日満ちて大あくびする声

聞こゆ誰が目覚めしや）

（大下一真「漆桶」）

偶然聞こえた大あくびにちがいありません。が、そこは墓原。「誰が目覚めしや」という表現に、死者たちへのなつかしい感情が動いています。

《はやく、つて言おうとひらく口に花飛
び込んできて言葉はあぶく》

（工藤玲音「水中で口笛」）

まだ二十代の若い歌人の歌には、はつとするほど新鮮な切なさどスピード感があり、動画のように映像が鮮やかです。

《さびしさのころろしづめに飛火野の
鹿を思へり桜食む鹿》

（高野公彦「水の自画像」）

「飛火野」は古代の歌枕の地。春日野の別称です。ゆつたりとした韻律とはるかな眼差し。やわらかく美しい抒情歌です。